

(八)戯曲の本體は——ユリウス・バアの言つたやうに——對話である。總ての表現を對話に置き。ト書で戯曲を書かうとするな。舞臺監督並に看客の想像力を尊重せよ。

(九)出來得る限り簡素に書け。エッセンスだけ書け。細かい事は、惜しいと思つても、切り捨てる。

先づ、ざつとこんな事でした。

題材は十年も前から私の頭の中にあつた事でした。それに血や肉をつけて行く準備は、この夏頃から始めました。主人公の學者——ほんとの學者ではないかも知れないが、一種の學者には相違ないので——の頭腦を作るだけにも、大分本を讀みました。ヤアコツプ・ベエメ、スエデンボルグ、ケエベル先生を通してのジャン・パウル、シヨオペンハウア、「深秘的幻影」の著者フィツシヤア、さういつた人達が

私を助けて呉れまし。孤兒に就いては、私の古い友人で、幼少の時自殺した母の幻影を絶えず見るK君が、生きた手本になつて呉れました。

さて書き上げて見ると、私が初めに空想してゐたものとは、大分違つたものが出來上がりました。

已むを得ない事かも知れませんが、残念で堪りません。

第一、私はこの戯曲を精々二十五枚か四十枚ぐらゐで書き上げたかつたのです。それが四百字の原稿紙で五十二枚になりました。しかも、もう一言一句も減らす事が出來ないやうに出來上がつてしまひました。短く書かうとしたのは、時間の觀念からです。五十二枚では、どうしても一時間かゝりませう。私はこの戯曲の性質から考へて、精々で四十分か四十五分で演じ終り得るものとしたかつたのです。

主人公の娘とその友人の息子との戀愛關係が——これは空想で拵へた事です——

—如何にも人爲的で氣に入りません。私は象徴的に書いたつもりですが、どうしても、そこまで来てゐません。

餘りに簡素を目ざした結果、主人公とその友人以外の人物の性格が單純になり過ぎた事も不満足です。この戯曲としては已むを得ない事なのですが。

主人公が友人に向つて言ふ詞の始めの部分が、皮肉らしく聞こえるのも、氣に入りません。主人公に對する——又その友人に對する——私の愛が足りなかつたからかういふ結果を見たのです。

主人公が「英雄」として見られはしないかといふ心配もあります。主人公の最後の詞が「解決」として感じられはしないかといふ懸念もあります。尤も、これは單に「心配」や「懸念」で、自分では、あれで好いと思つてゐるのです。

友人が金を置いて行くといふ事が、あつても無くても好いやうに思はれます。私は初め、あの金を主人公が家を出て行く孤兒に遣るやうにする積りだつたのです。

併し、それは「芝居らしい事」だと思つたので、やめてしまつたのです。併し、金を持つて來るといふ事は、あの友人の境遇から考へても、ありさうな事だし、二人が二十年前の物語へはひつて行く口火としても、何かさういつたものが欲しかつたのです。そこで、最後に金を置いて行く。主人公はそれに氣がつかずにある。金は無關心に舞臺に残るといふ風にしてしまつたのです。これは明に再考の餘地がありません。

(二) 上場後の感想

舞臺監督は一切を土方與志君に託して、私は一言も口を入れないつもりでした。ところが謙遜な土方君は、自分一人では到底任に堪へないと言ふのです。そこで、私とその助手を勤める事になりました。併し、私は主として、作意の表明に盡したので、全體の演出は土方君一人の努力の結果であると言つて差支ないのです。

唯、舞臺照明の問題だけは、帝國劇場の電気部との関係が、他の劇場のそれとの関係とは事情が違ふので、少くとも最初の三四日は、土方君の意圖通りに行きませんでした。

私は作者として、今度の演出全體を感謝して受ける價值のあるものだと思つてゐます。殊に左團次君が、土方君の殆ど苛酷に過ぎる程な日々の「ダメ」を快く聞き入れて、いつもとは全く違つた臺詞の Intonation や Inflection を見せて呉れた事は、有難い事だと思ひます。私は古い友人として、左團次君が早くから既に持つてゐるもので、まだ世間の誰もが知らずにあるものが、始めて發表せられたのを喜ばずにはゐられません。左團次君のこの方面轉換は、「行き詰まつた」と言はれる左團次君に、測るべからざる「前途」のある事を思はせます。

新聞記者に扮した八百藏君、荒次郎君、長十郎君などの、熱心な研究にも感謝の念を禁じ得ません。八百藏君などは態々「神曲」の翻譯まで讀んださうです。荒次

郎君は或所で特に訪問記者の實際を細に觀察して來たのです。

友人に扮した猿之助君も、「心中後日譚」をやつた直ぐ後の老役なので、少なからぬ苦心があつたらしいのです。この人も土方君や私の毎日のやうに出す「ダメ」——随分遠慮のない「ダメ」を従順に聞き入れて呉れました。唯、生活の方面は違つても、主人公の學者と殆ど同等な位にあるべき人間が、どうも今日までの所では、一段低い人間のやうに見えるのが残念でした。併し、これは藝の力だけでは、どうする事も出来ない事かも知れません。

宗之助君の孤兒は、私の書きやうが間違つてゐたのか、私の考へてゐる人物とは大分違つたものが出來ました。單に宗之助君が扮したあゝいつた人間として見れば、流石にしっかりとりましたものです。併し、今日までのところでは、作者の考へてゐる人物とも違へば、全體の演出とも調和してゐないやうに思ひます。併し、まだ／＼これから先きも、不遠慮に「ダメ」を出すつもりですから、もう五六日もすれば、立

派なものになるのでせう。

二人の女優には全く氣の毒でした。私の養成しつゝある六人の中の二人ですが、全くの素人で、修行にはひつてから、まだ一月半にしかならないのです。それが、いきなり舞臺に立つて、一流の専門家を相手にして技を演ずるのです。冒険とも何とも言ひやうがありません。それを敢てさせたのは私です。私は二人が氣の毒でなりません。

併し、修行としては實に有難い修行です。二人は一面それを非常な幸福だと思はなければなりません。

山本安英子は臺詞は好いのですが、體形の悪い人です。それに注意して匡正を心がけなければなりません。中條惠美子は體に柔かみがないのと、動作が荒いのがいけません。一言も聲を出さない役ですが、しかも事件の中心人物で、決して生やさしい役ではありません。(大正十年十月四日)

大正十三年一月四日 刷
大正十三年一月七日 發行

定價金壹圓五拾錢

著 者 小 山 内 薫

發行者 内 藤 加 我

東京市小石川區原町拾番地

印刷者 高 梨 知 愛

東京市神田區今川小路二ノ壹

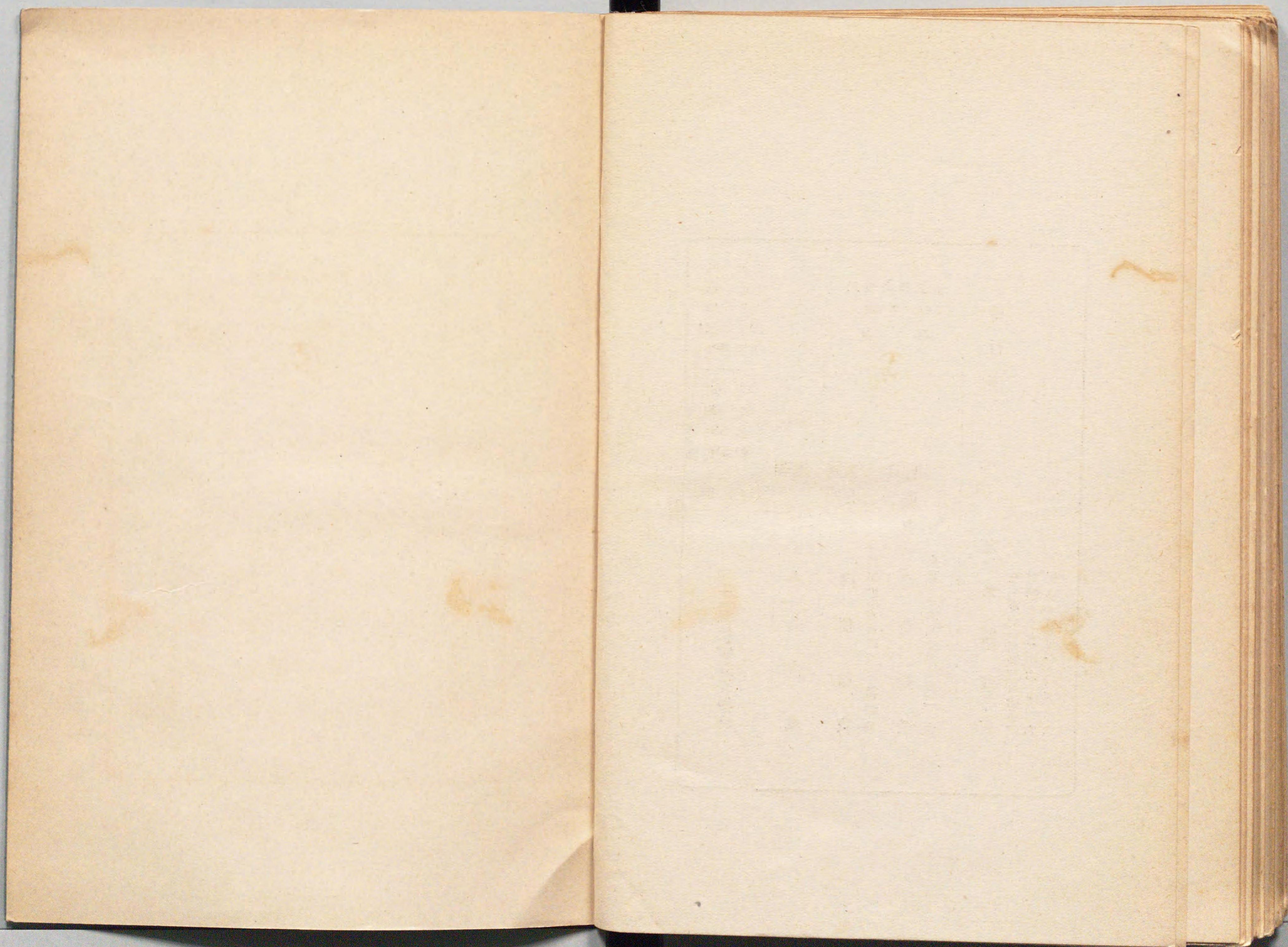
三田文藝叢書
第三編
息子

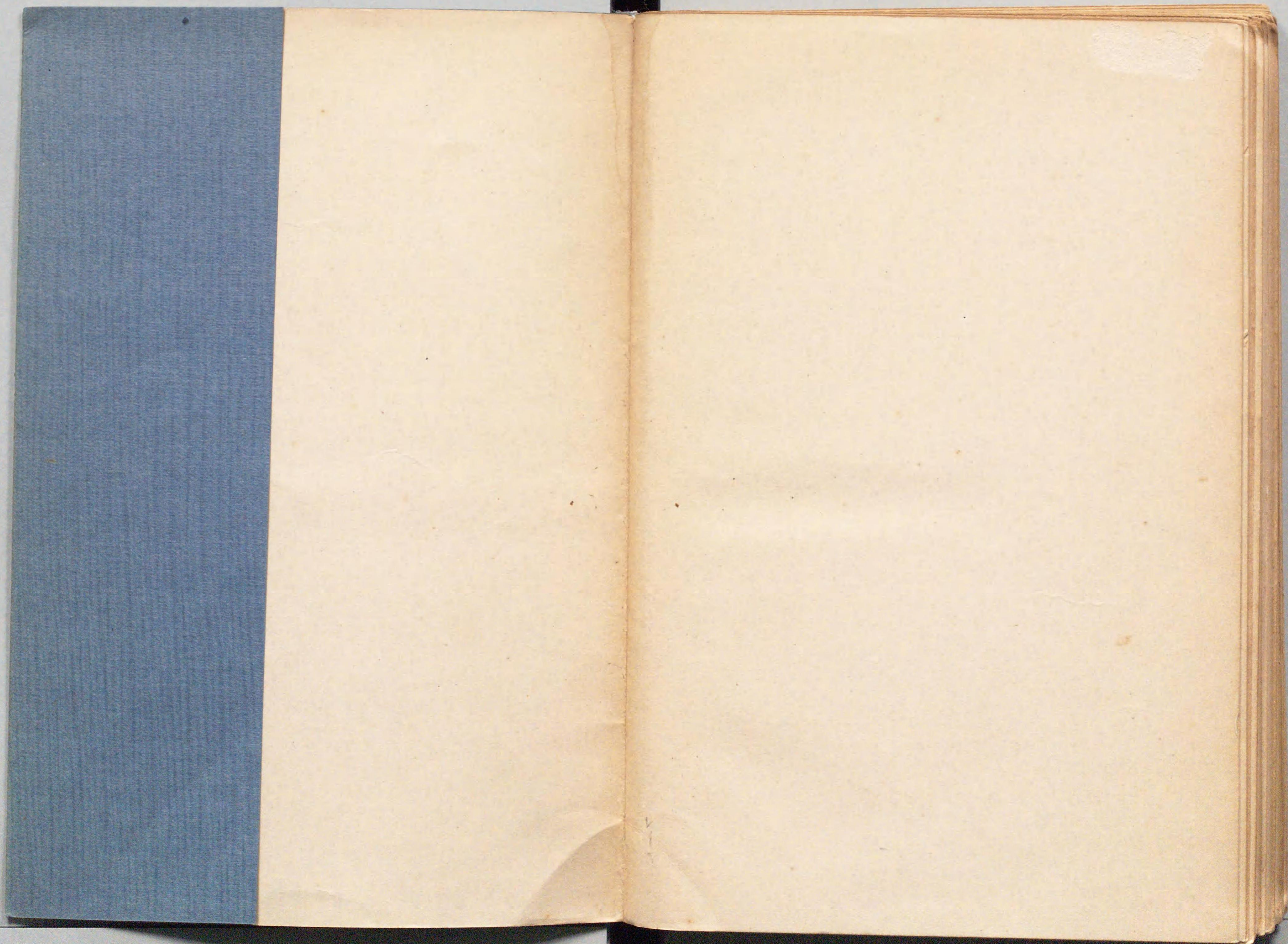


發行所

東 光 閣 書 店

東京市小石川區原町拾番地
電話・小石川六七一六
振替・東京一四七九六





店書閣光東